

に於て事新しき實業教育の振興の叫ばる、所以は實に茲に存すると言はねばならぬ。

而も、現行の實業教育に就いて觀るに、漸く時代の進運に取殘され、産業社會の現實的要求に背反して、著しく非實際的に傾きたるかの嫌ひがある、殊に學校教育に於ては、實地産業社會との接觸極めて薄く、机上理論的に走り過ぎて、實地に役立つ難いとの非難があるか、之は確かに現行實業教育の弊所を衝くものと言はねばなるまい。從て此の際學校教育の内容及び方法を實際化すべきは勿論、特に依度實業教育に在りては、其の地方産業の實情を考慮するを要し、同時に又、從來の實業教育（特に農業教育、工業教育）が兎角經營乃至經濟的方面の知識を閉却したる傾きありしに

鑑み、經濟的知識の涵養にも意を用ふることか、教育の實際化を圖る上に於て肝要なる事柄である。

而も纏つて考ふるに、實業教育に於ては、單なる實際的技術の訓練乃至は經濟的知識の養成のみを以て足れりとするものではない。蓋し、職業技術修得の目的は、之によつて個人的生活手段を獲得するに止まらぬ、更に進んで社會協同體的發展のために、寄與貢獻することにある。即ち、職業人としての陶冶は、之を通じて社會人としての職分機能を完ふせしむるを以て窮極の目的とせねばならぬ。

然るに從來の實業教育は、動土すれば技術教育の末に走り、職業を以て單なる個人的生活の手段と見做す傾向があつた。世間一般も亦實業教育を漠然卑近なる